E. Caldwell　短篇小説研究

―― “Crown-Fire”と“The Strawberry Season”を中心に ――

98E027　　泉　田　ゆう子

はじめに

アースキン・コールドウェル（Erskine Caldwell）は、1930年代のアメリカ文学を代表する作家である。1903年12月17日、ジョージア州はホワイト・オーク教会の牧師館で生まれた。父は連合改革長老教会の牧師であり、アメリカ南部地域の教会から教会へと移動していた。そのため、コールドウェル一家は、同じ土地に6か月以上滞在していることはめったになかった。母は神学校や女子短大の英語の先生であり、読み書きは、主に母から教わっていた。コールドウェルは、若かった頃、綿実油工場でアルバイトをしたり、スポーツ記者や新聞記者、医者の運転手など、数多くの職業についた。これらの仕事から学んだことや、いろいろな土地に移り住んで、出会った人々、見てきたものなど、様々な経験に基づいて、コールドウェルの小説は書かれたのであろう。そんなコールドウェルの作品の舞台は、アメリカ南部の田舎であった。南部の人々の貧困や農民の生活、社会に対する不正への怒りなどを主題として、作品を形成している。コールドウェルは、このような主題に直接ふれて抗議するのではなく、土着のユーモアをもって、滑稽に書きあげている。コールドウェルは、『タバコ・ロード』（*Tobacco Road*, 1932）によって、有名になった。これは、“プア・ホワイト”（Poor Whites）と呼ばれる南部小作農民が近代産業主義に屈服していく、悲惨な姿を描いた作品である。『タバコ・ロード』はベストセラーとなり、同じジョージア出身のジャック・カークランドによって戯曲化され、ブロードウェイで7年半（3,182回）上演される、大ヒットとなった。このほか、代表作品に、『神の小さな土地』（*God's little Acre*, 1933）や『巡回牧師』（*Journeyman*, 1935）などの長篇小説があるが、コールドウェルは、短篇小説でも高く評価されている。コールドウェルを短篇小説家とみなしている評論家は多い。「土曜評論」誌主筆ヘンリー・セイデル・キャンビーはつぎのように言っている。

「私自身はコールドウェルを根本的かつ本質的には短篇作家であると見ている。一般大衆のあいだでのコールドウェルの名声は「タバコ・ロード」の戯曲―それは他の作家（ジャック・カークランドを指す＝訳者）によって書かれたものだが、コールドウェルの長い短篇ないしはフランス人の呼方に従うと中篇に基づいている―の信じがたいほどの成功によるものである。しかしそのもっとも独創的、もっとも効果的、かつもっとも優れた点においてはコールドウェルは、アーヴィング、ホーソン、ポウなどにはじまり、世界文学に不動の位置を確立したアメリカ短篇作家の卓越した系列に属するのである[1]。」

また亀井俊介氏は次のように述べている。

「コールドウェルの短篇小説はいいですよ。彼は基本的には短篇小説作家といえるかもしれない。フランスの代表的な短篇作家にモーパッサンがいますけれど、その影響を受けているらしく、じつにうまい構成、簡素な文体で、おもに農民を登場させて、南部の姿とその問題を描いている。プロテストも、長篇小説より的確に、強烈になされていることが多い[2]。」

コールドウェルの作品には、難しい単語は使われていない。コールドウェルは、自分の愛用

する辞書から四音綴語を全部消し去ったというエピソードも残っている。コールドウェルは読者に伝えたいことを、いかにわかりやすく、簡単な言葉で表現できるかを、常に心がけていたのだ。それはコールドウェル自身の言葉、"All I wanted to do was tell a story, to tell it to the best of my ability[3]."（私のやりたいことのすべては、私の力の及ぶ限り、物語を語ることであった）ということからも感じられる。コールドウェルは、作品をどのように表現するか、精一杯考えて小説を書いていたのだろうし、わかりやすい文体にすることで、たくさんの読者に読んでもらいたいという思いがあったのだろう。そこにコールドウェルの小説を書くおもしろさがあったのではないかと思う。コールドウェルは約150篇もの短篇小説を書いているが、今回私が卒業論文で取り上げる作品は「山火事」（"Crown-Fire"）と「苺の季節」（"The Strawberry Season"）の二つの短篇である。

Ⅰ　作品研究（Ⅰ），"Crown-Fire" について

この物語（"Crown-Fire"）は、シドニーという少年の恋物語であり、イニシエーションの物語ともいえる。シドニーは幼なじみのアイリーンと学校の帰りを一緒に帰りたくて、待ちぶせしているのだが、アイリーンはシドニーと一緒に歩くことを嫌がる。しかし、山火事が起きたことで、アイリーンの態度が変わっていくのである。私はこの物語を加藤修訳のものと、原文の両方を読んでみた。両方を読んでみたことで、感じたことや気付いたことがいくつかあったので、まず、それについて触れたいと思う。以下、引用文の後に加藤訳を（　）内に示す。下線部は筆者による。

I did not know what Irene was going to do when I jumped up and surprised her. I did not want her to run away from me again ; each time I had tried to walk home with her in the evening she had run so fast that I could not keep up with her. <u>But I had to see her and to talk with her.</u> I had wished all that summer to be able to walk along the road with her. Once she had said she did not hate me ; but no matter what I said to her, she continued to run away from me, leaving me alone in the road[4].

（急に飛び出していってびっくりさせたらアイリーンはどうするか、ぼくには見当がつかなかった。ぼくはこんどもまた彼女に逃げられたくなかった。夕方、家に帰るとき一緒に歩こうとすると、アイリーンはそのたびにぼくがついていけないほどはやく走り去ってしまうのだ。<u>でもぼくはどうしても彼女に会いたいし、彼女と一緒に歩きたかった</u>。夏のあいだ中、なんとかしてアイリーンと一緒に歩きたいと思いつづけてきた。一度、彼女はぼくのことがきらいなわけではないと言ったことがあるが、何か話しかけようとするとすぐ逃げだしてしまって、ぼくはいつも置き去りをくった[5]。）

But I had to see her and to talk with her. の文であるが、加藤訳では「でもぼくはどうしても彼女に会いたいし、彼女と一緒に歩きたかった。」と訳している。原文では、talk だから「会って話したい」と訳すのではないだろうか。けれど、物語の中で、シドニーはアイリーンと歩きたいと何度も言い続けていて、一緒に歩きたいということを強調している。だからここで、そのまま話したいとするよりも、歩きたいとした方が、話の流れとしても、また、シドニーの気持ちを強調するためにもいいと思い、talk だけれども、歩きたいと訳したのではないか。実際、一緒に歩きたいという意味での walk や go は何度も何度も使われているが、talk

はこの文だけにしか使われていない。I had to see her and to talk with her. を直訳すると、「私は彼女と会って、話さなければならない」になる。have toは「しなければならない」だから、義務の意味で、wantは「したいけれども、できなくても仕方ない」というニュアンスがある。ここでwantではなく、have toを使ってあるのは、シドニーの強い気持ちを表すためだろう。シドニーはどうしてもアイリーンと会って一緒に歩かなければならないのだと、自分の気持ちを追い込んでいることがhave toから感じられる。

次は以下の文である。

Because I had been waiting all summer, ever since school was out in June, for the time to come when I might walk along the road with her in the evening—because I had lain awake night after night, staring at the blackness, thinking of her—because I could not keep myself from touching her—I released her arm and pressed my hand over her bosom[6].

（ぼくは夏のあいだ中、六月に学校が終わってからずっと、夕方、彼女と一緒に歩く機会がくるのを待っていた。ぼくはくる晩もくる晩も彼女のことを考えながら暗やみをじっと見つめて眠ることができなかった。だからぼくはどうしても自分の気持ちを押さえることができなかった。ぼくは彼女の腕を離すと、両手を彼女の胸に押しあてた[7]。）

原文からみた方が、アイリーンの胸を触ってしまったことを強調していると思う。3つのbecauseで表されているように、今までのいろんな気持ちがあって、その気持ちを押さえられなくなって触ってしまったというのがよくわかる。加藤訳では、そのことを、「だからぼくはどうしても自分の気持ちを押さえることができなかった」という一文で補っている。原文には、この「どうしても自分の気持ちを押さえることができなかった」にあたる文はないけれど、原文からみて感じられるシドニーの強い気持ちを、原文を読んでいない読者により鮮明に伝えるために、この一文を挿入したのではないかと思う。

ここでもう一点注目してもらいたいのが、I released her arm and pressed my hand over her bosom. のhandである。handということは「どちらか一方の手」を表す。シドニーはアイリーンの胸を片手で触ったことがわかる。しかし、加藤訳では「ぼくは彼女の腕を離すと、両手を彼女の胸に押しあてた。」とhandを「両手」と訳している。ただ日本語で「手」と言うと、それは片手の意味なのか両手の意味なのか、よく分からなかったりするが、英語では、複数形を表す－sがつくかどうかで、どちらなのかがはっきりしてくる。この「山火事」には、この部分以外にもhandとかhands がたくさん使われている。片手なのか両手なのか注目して読んでいくと、話の情景がより正確にイメージできると思う。

次は以下の部分である。

I did not know what to say. I did not mind so much the whipping he would give me as I did my father's knowledge of what I had done to her. I did not know what to do. I was afraid to release her arm, and I was afraid to continue holding her[8].

（ぼくは何と言っていいかわからなかった。父にぶたれることよりも、ぼくがアイリーンにしたことを父に知られることの方がもっと心配だった。それを考えると、彼女の腕を離したものか、つかまえたままでいたものか迷った[9]。）

ここでは、I was afraid が2回使われている。普通、こういった使い方はあまりしないと

思うけれど、ここでは強調のために2回使われているのだろう。アイリーンの腕を離したらいいのか、つかまえたままでいた方がいいのか、どうしていいのか分からず、不安でいっぱいだったということを、シドニーのこの不安な気持ちを強調するための繰り返しだと思う。加藤氏はそれを「迷った」としているが、シドニーの不安を表すためには、もう少し違う訳し方をした方がいいのではないか。私なら、「彼女の腕を離したものか、つかまえたままでいたものか、ぼくはどうしたらいいのか不安でいっぱいだった。」と訳すだろう。

"When I went to the road to wait for you, Irene, I didn't think of doing anything like that. I only wanted to see you and walk home with you. But …when I caught you …I couldn't keep from touching you. I had to. I just had to hold you[10]."

(「道で君を待っているあいだ、はじめからあんなことをしようと考えていたわけじゃないんだ。でもぼくは君をつかまえたとき、どうしても君の体にさわらないでいられなかった。自分でもどうしようもなかったんだよ[11]」)

この部分で、加藤訳では、I only wanted to see you and walk home with you.の一文が完全に欠落している。前に見たのと同じように、have to が2回使ってあったり、want にonly をつけてあったりと、こんなにもシドニーの強い気持ちを強調しているのだから、この一文を省略しないで、しっかり訳した方がいいのではないかと思う。また、この部分と同じようなことがいえるのが次のところである。

I did not know what to say. I did not mind so much the whipping he would give me as I did my father's knowledge of what I had done to her. I did not know what to do. I was afraid to release her arm, and I was afraid to continue holding her[12].

(ぼくは何と言っていいかわからなかった。父にぶたれることよりも、ぼくがアイリーンにしたことを父に知られることの方がもっと心配だった。それを考えると、彼女の腕を離したものか、つかまえたままでいたものか迷った[13]。)

前にも触れたところであるが、ここの2回目のI did not know what to do. が省略して訳してある。ここでも、同じ文を2回使うことで強調していると思う。

次に物語の内容を見ていく。この物語では、とにかくシドニーがアイリーンと一緒に歩きたいということを繰り返し言っている。しかし、アイリーンは一緒に歩くことを嫌がる。物語の前半では、アイリーンはシドニーに胸を触られて怒ったり、「シドニーのお父さんに言いつけてやる」と何度も言ったり、「手を離さないと大声を出す」などと言ったりしている。しかし、樹冠火が起こって、アイリーンの態度が変わるのである。アイリーンは自分からシドニーの手をとって胸に押しあてたり、シドニーにもたれかかったり、キスしたりする。樹冠火がアイリーンの心に変化をもたらしたのだろう。樹冠火（crown-fire）とは、樹木の梢づたいに広がる森林の火事で、非常にはやい速度で広がることが多いという。急にアイリーンの態度が変わったのはどうしてなのか？授業でもこのことについて取りあげたのだけれど、様々な意見があった。「火事が怖くて、不安になり、シドニーに頼りたかった」という意見、「それはシドニーでなくても誰でもよかった」という意見もあった。また、「アイリーンも実はシドニーが好きなのだが、今までは素直になれずにいて、樹冠火がきっかけで態度に表した」という意見もあった。樹冠火という自然の脅威に直面し、人間の力ではどうすることもできないことを感じ、不安を抱き、

誰かに頬りたい気持ちになったのだろう。アイリーンは胸の鼓動の高鳴りを、山火事の恐怖心からくるものだけでなく、シドニーに対しても、これまでとは違う特別な感情が生まれたためのものと思ったのかもしれない。普段見られない樹冠火が起こり、これによって、アイリーンとシドニーの距離が近づいたのではないか。また、ふたりの心理的距離と山火事は比例しているように感じた。樹冠火が起こった時には、ふたりの距離は最も近づいたと思うし、ふたりが別れる時には、もう火事はすっかりおさまっている。物語の最後で、シドニー自身も山火事が起こらない限り、アイリーンをつかまえることはできないと言っている。この恋と山火事が大きく関係していることをシドニー自身も分かっていたのである。この山火事はシドニーにとって、アイリーンとのことを毎年思い出させるものになったのだ。しかし、シドニーはアイリーンに対する気持ちが恋ということをわかっていない。次の文からそのことが感じられる。

"Let me walk part of the way home with you, Irene. Please let me, this one time."

"Why do you ask to do that ?"

She continued to look at me while I tried to think of something to tell her. I could think of no reason, except that I wanted to go with her. I had waited all summer for the time to come when she would let me walk with her ; but now when she had asked me why I wished to go with her, I did not know what to say[14].

(「途中まででいいから一緒に歩かせてくれよ、ねえ、アイリーン。たのむから」「なんでそんなことをしたいの？」

ぼくが何か言うことを考えているあいだ、アイリーンはぼくをじっと見つめていた。ただ一緒に歩きたいというだけで、ほかに理由なんか思いつけなかった。ぼくは夏のあいだずっと、アイリーンが一緒に歩いてくれることを待ちつづけていた。しかし、なんで一緒に歩きたいかと聞かれても何と言っていいかわからなかった[15]。)

シドニーはアイリーンと一緒に歩きたいとずっと思っているのだが、どうして一緒に歩きたいのかは分からない。なんで一緒に歩きたいのかと聞かれても答えられないのである。恋というものをまだ知らないのだろう。この物語を読んでいて、シドニーがアイリーンを好きなのは明らかであるが、それを直接表すような好きとか恋とかいう言葉は一度も使われていない。そんなシドニーにとって、この山火事は初恋の思い出になったであろう。シドニーがいつそのことに気づくかは分からないが、大人になって、山火事が起きるだびに、アイリーンのことを思い出すに違いない。読者は、シドニーとアイリーンを通して、自分の初恋を懐かしく思い出すことだろう。好きな子と学校の帰りを一緒に帰りたいという気持ちは1度や2度は誰もが思ったことだろう。この作品は1930年代に書かれたものであるが、30年代は、世界大恐慌の影響を受けて、世の中は不況であり、アメリカ南部の農村地帯は特に貧しかった。そんな状況の中、この作品を読むことで、少しでも読者の心をあたたかくしようという、コールドウェルの思いがあったのだと思う。恋を主題としたこの作品は、ありがちな話のようではあるが、逆にそれが身近に感じられる。主人公の気持ちに共感し、ほのぼのと初恋を懐かしむことができるのではないか。コールドウェルは読み書きを母親から教わって、公立学校へ通わなかったので、好きな女の子と学校の帰りを一緒に帰るという経験をしたかどうかはわからないが、この作品は、多くの読者が共感することだろう。約70年前に書かれた作品に共感することができるのは、初恋

という主題だからだろう。恋愛感や恋愛のスタイルは世代によって異なってくるけれど、初めて人を好きになった時の淡い恋心は世代に関係なく共通しているものではないかと思った。こういった作品だからこそ、これから先もたくさんの読者に読み続けていかれるであろう珠玉の作品であると思われる。

Ⅱ 作品研究（Ⅱ），"The Strawberry Season" について

物語の舞台は、アメリカ南部ジョージア州、早春の苺の収獲期である。苺摘みを手伝っている青年たちは、赤く熟した苺を娘たちの胸元に落とし込んで、叩いてつぶすという「苺叩き」といういたづらをしていた。ある日、主人公の青年は「苺叩き」のさい、青年たちの間で人気のあるファニーという娘の乳房を思わず叩いて泣かせてしまうのである。しかし、ファニーは青年をせめたりはしなかった。青年は思わずファニーを抱きしめ、キスをした。「苺叩き」を契機とした、若い男女の淡い恋を描いた作品である。"Crown-Fire" と同様に、この作品について考察していく。

We used to have the best times picking strawberries. There were always a lot of girls there and it was great fun teasing them. If one of them stooped over a little too far and showed the least bit of herself, whoever saw her first shouted as loudly as he could. The rest of us would take up the yell and pass it all over the field. The other girls would giggle among themselves and pull their skirts down. The girls who had caused the shouting would blush and hurry away to the packing shed with a tray of baskets. By the time she returned some other girls had stooped over too far and everybody was laughing at her[16].
（苺摘みはいつも本当に楽しかった。苺畑には大勢の女の子が来ていて、その娘たちをからかうのがとてもおもしろかった。彼女たちは苺摘みに夢中になって前にかがみ込みすぎるので、スカートの下が丸見えになってしまうのだ。するとそれに気付いた誰かが「見いーえた、見えた」と大声ではやしたてる。そして他の者も一斉にはやしたてるので、その声が畑じゅうに伝わっていく。他の女の子たちはくすくす笑って、自分のスカートのすそを引っぱりおろした。はやしたてられた女の子はまっ赤になって、苺の籠をかかえると荷造り小屋の方へかけ出していく。そしてその娘がまた畑に戻ってくる頃にはこんどは別の娘が、「見いーえた、見えた」とはやしたてられていた[17]。）

We used to have the best times picking strawberries. の文で、used to が使われている。used to は「以前は…であった」という意味がある。used toから、主人公は、今は立派な青年なのだが、少年時代を回想しているのではないかと感じた。「苺叩き」で、ファニーの乳房を叩いて泣かせてしまったことが、ずっと忘れられないのだろう。この物語は、Early in the spring when the strawberries began to ripen, everybody went from place to place helping the farmers gather them. という文で始まるのであるが、in the spring のthe の用法は、アメリカ英語的用法であり、季節を表す語の前に定冠詞がつけられることにより、主として繰り返された事件を示すものと思われる。spring の前にtheがついていることと、used toに過去の常習的習慣を表す意味があることから、「苺叩き」は毎年毎年苺を摘むたびに行われてきたことがわかる。大人になった主人公が、今でも同じように苺叩きをしている少年たちを見て、自分の少年時代を思い出しているのではないかと感じた。…whoever saw

her first shouted as loudly as he could. の部分であるが、加藤訳では、「…するとそれに気付いた誰かが「見いーえた、見えた」と大声ではやしたてる」となっている。初め、「見いーえた、見えた」という訳を加藤氏が情景をイメージして補ったのではないかと思った。しかし、この部分は、1930年にアメリカの小雑誌に掲載された時の「初版」と異なっている。初版では、…whoever saw her first shouted, *"Cyclone! Cyclone!"* as loudly as he could. となっていることから、加藤氏は初版のものを翻訳したのではないかと思った。この他にも初版と異なっている部分があるので、いくつかの例を示すと次のようになる。

(a) 削除〈(　) 内の部分がカットされている〉

- Fanny was good-looking, too. (*That had a lot of to do with it. Fanny said she had never been anyone's sweetheart. I wish she had been mine.*)
- She saw me looking at her bare legs and smiled just a little (, *I thought*).
- I wanted to tell her how nice-looking they were but I did not dare to. (*I did not know her well enough.*)

(b) 訂正〈(→　) で示す〉

- "I'll have to unfasten this too, to get the berry out," she hesitated (→*said*).

(c) …and stood at the gate looking at each other (*for*) several minutes.

難しい単語は使わないように心がけていたことと同様に、コールドウェルが独自の文体を確立するために、努力をし、何度も推敲し、試行錯誤をくぐり抜けて、ようやく完成した作品であることが感じられる。

Another thing we had a lot of fun out of was what we called strawberry-slapping. One of us would slip up behind a girl while she was stooping over filling her baskets and drop a big juicy ripe strawberry down her dress. It usually stopped midway of her back and there we slapped it good and hard. The mashed strawberry made a mess. The red juice oozed through the cloth and made a big round stain. If the berry was against the skin it was even worse. Very few girls minded that though. Everybody wore his old clothed in the fields and it did not matter about the stain. The worst part was being laughed at. Everybody stopped picking berries to laugh. What that was over, everybody went back to work and forgot it until somebody else got strawberry-slapped. We had a lot of fun picking berries[18].

(ぼくたちがもう一つ、おもしろがってやったのは「苺叩き」だった。夢中になって苺を摘みながら前にかがみ込んでいる女の子のうしろに忍びこんでいって、大きく赤く熟れた苺を襟首のあいているところから服の中へ落とし込む。そしてそれが背中の途中で止まったところで思い切り叩く。すると苺はぐしゃぐしゃにつぶれて、赤い汁が服に滲み出て大きな丸いシミをつくる。それでもそんなことを気にする女の子はほとんどいなかった。誰もが畑では古着を着ていたからシミになっても平気だった。でもやっぱり、若い女の子たちはあんまり笑われるのは恥ずかしくていやだった。しかし、そのあとはみんなけろっと忘れたように苺摘みの仕事に一生けんめいになっていた。本当に苺摘みは楽しかった[19]。)

good and～で、「とても～」という意味で、very と同じ意味になる。これは米口語的表現で、good and の次に続く形容詞・副詞に対して強意の副詞と同様の働きをする。If the berry

was against the skin it was even worse. とEverybody stopped picking berries to laugh.、until somebody else got strawberry-slapped. の三つの文は、加藤訳では欠落している。この文を含めて訳すと次のようになる。

（ぼくたちがもう一つ、おもしろがってやったのは「苺叩き」だった。夢中になって苺を摘みながら前にかがみ込んでいる女の子のうしろに忍びこんでいって、大きく赤く熟れた苺を襟首のあいているところから服の中へ落とし込む。そしてそれが背中の途中で止まったところで思い切り叩く。すると苺はぐしゃぐしゃにつぶれて、赤い汁が服に滲み出て大きな丸いシミをつくる。苺がじかに肌に触れていたらなおさら困ったことだ。しかし、それを気にする女の子はほとんどいなかった。だれもが畑では古着を着ていたからシミになっても平気だった。一番悪いことは、笑われることだった。誰もが苺を摘むのをやめて笑った。それが終わると、みんな仕事に戻ってそのことを忘れてしまったが、また、誰かが苺叩きをやられるのだった。本当に苺摘みは楽しかった。）

"It's all right now," she smiled painfully. "It still hurts a little though." Her head fell on my shoulder. I put my arms around her. She wiped the tears from her eyes. "It's all right now," she repeated. "It will stop hurting soon." She lifted her head and smiled at me. Her large round blue eyes were the shade of the sky when the sun has begun to rise[20].

（「まだちょっと痛いけど、もう大丈夫よ」ファニーの頭がぼくの肩によりかかってきた。ぼくは両腕に彼女を抱いた。「もう大丈夫よ。じきによくなるわ」彼女は顔を上げてぼくを見ながらにっこりと笑った。涙を拭いたあとの彼女のつぶらな青い瞳は、朝日が昇りはじめる頃の空の淡い影のような色をしていた[21]。）

She smiled painfully. の文は加藤訳では欠落していた。She wiped the tears from her eyes.も欠落していたけれど、「涙を拭いたあとの彼女のつぶらな青い瞳は、朝日が昇りはじめる頃の空の淡い影のような色をしていた」と訳してあるように、Her large round blue eyes were the shade of the sky when the sun has begun to rise. の文の前にこの一文を補っているようである。原文を直訳する場合と、加藤訳のようにShe wiped the tears from her eyes.と、Her large round blue eyes were the shade of the sky when the sun has begun to rise.の文をまとめて訳す場合とどちらも同じようではあるが、加藤訳のほうが、涙のせいで、青い瞳が淡い影のような色をしていたという感じがする。Her head fell on my shoulder. I put my arms around her. で、まちがって乳房をたたいてしまったことが、愛の行為をまねいていることが表現されている。

Fanny unbuttoned the dress down to her waist. The berry was mashed beneath her underclothes. The scarlet stain looked like a morning-glory against the white cloth. "I'll have to unfasten this too, to get the berry out," she said. "Let me get it," I urged. "You don't want the juice all over your fingers." She unfastened the undergarment. The berry lay crushed between her breasts. They were milk-white and the center of each was stained like a mashed strawberry. Hardly knowing what I was doing I hugged her tightly in my arms and kissed her lips for a long time. The crushed strawberry fell to the ground beside us. When we got up, the sun was setting and the earth was becoming cool[22].

（ファニーは、服のボタンをウエストのあたりまではずした。苺は押し潰されて、白い下着に朝顔のような深紅のシミをつけていた。「ここもはずさないと苺がとれないわ」「ぼくがとってあげるよ。君の手が汚れるといけないから」ファニーは肌着のボタンもはずした。苺は両の乳房のあいだで潰れていた。乳白色の両の乳房の先が熟れかかった苺の色をしていた。ぼくは思わず、ファニーを両腕にしっかりと抱き締めた。長いあいだ、口付けをした。潰れた苺が二人のあいだの地面に落ちていた。ぼくたちが立ち上がったとき、日の沈みかけた大地は冷え冷えとしてきた[23]。）

"Let me get it," I urged. "You don't want the juice all over your fingers." の部分で、加藤訳では「ぼくがとってあげるよ。君の手が汚れるといけないから」と訳してあり、I urged. が訳されていない。urgeは「強く主張する」という意味であるから、青年が「ぼくがとってあげる」としきりに言い張ったことがわかる。青年はファニーの指が汚れるといけないからと言いつつも、本当はファニーに触れたいという思いがあったのではないかと感じる。ファニーが服のボタンをウエストのあたりまではずし、思いがけず、ファニーの胸を見てしまったことで、青年の性欲が高まったのだと思う。それで、思わずファニーを抱きしめキスをしたのだろう。ここで、2人の愛の行為はキスにまで発展している。そして問題はその後のWhen we got up, the sun was getting and the earth was becoming cool. の部分で、「ぼくたちが立ち上がったとき、日の沈みかけた大地は冷え冷えとしてきた」と訳されている。苺叩きは午後の3時頃であったから、早春とはいえ、2、3時間は経っているだろう。愛の行為はキスだけとは考えられない。しかも、座って抱き合っていたのに、寝ていたことを連想させるgot up という表現を使っている。2、3時間の時の経過をさりげなく表現していて、その間の出来事を読者に想像させている。書いていないからそれだけ想像力をはたらかせる余地があるわけで、そこに文学の楽しさが感じられる。

前にも述べたが、この物語は、Early in the spring when the strawberries began to ripen, everybody went from place to place helping the farmers gather them. の文で始まる。第一パラグラフでは、登場人物すべてが3人称でだされている。これは、一般的な状況を客観的に示すためであろう。everybodyは、農場を渡り歩いて苺摘みをする移動労働者のことである。第二パラグラフで、1人称が出てくるが、we という複数形で、Iという個人はまだ登場しない。まず、3人称で一般的状況を出し、次に1人称複数、そして1人称単数と、語り手の個人的体験に焦点をしぼっていくという展開を実に見事に描いている。

Fanny turned and went down the road in one direction and I went up the road in another. It was the end of the strawberry season[24].

（ファニーはくるっと向こうをむいて、そちらの道を、ぼくは反対方向の道を歩いていった。苺の季節は終りかけていた[25]。）

物語の最後は以上のようになっている。ひそかに好意を寄せ合う2人の愛のよろこびの後に、別々の道へ帰っていくという別れの痛みを響かせている。

"The Strawberry Season" は、「苺叩き」を契機として、青年男女の淡い恋を描き、青春のみずみずしさが印象的である。コールドウェルは、青年の甘く切ない恋を象徴的な苺とからませて表現したかったのではないか。コールドウェルの数多くある短篇のなかで、人気のあるこの "The Strawberry Season" はのびやかに健康的で、ほのぼのとした愛をはぐくむ若者たちへ注ぐ、コールドウェルの暖かい目が背後にあるからではないだろうか。もしかしたら、若

いコールドウェル自身も季節移住労働者の群れに身を投じて、その実状を自らの目でみたうえでの、体験的生活事実を踏まえたリアルな場面描写であるかもしれない。コールドウェルは、Jackpotの中で、“The strawberry Season”を振り返って、「私はこの物語が好きだ。これは、問題を解決したり、哲学的高みにまで到達していないことはたしかだ。それに、きっとこの作品は、モデル・フィクションとしても合格はできまい。しかし、すべてのことを語り尽くしたあとでも、なお、結局私はこの作品が好きなのだ[26]」と述べている。
また、昭和57年4月から施行の高等学校新学習指導要領に基づいて編纂された英語の全教科書に当たってみたところ、7点までもにこの“The Strawberry Season”が載せてあった。1930年代の作品が、これほどまでも支持されているのは、物語の内容だけではなく、その文体にも理由があるのではないかと思う。次に文体の側面から考察してみたい。

Ⅲ “The Strawberry Season”と“Crown-Fire”の文体について

1．繰り返しの表現

コールドウェルの作品を読んでいると、繰り返しの表現が多いことに気がつく。これはコールドウェルの文体の特徴の1つといえるだろう。一例として、“The Strawberry Season”の冒頭の部分を引用して見ていく。

Early in the spring when the strawberries began to ripen, everybody went from place to place helping the farmers gather them. If it had been a good season for the berries and if there were many berries to pick, there would sometimes be as many as thirty-five or forty people in one field. Some men brought their families along, going from one farm to the next as fast as the berries could be gathered. They slept in barns or any place they could find. And, because the season was so short, everybody had to work from sunrise to sunset[27].

(a) from～to の用法

- ～ everybody went from place to place～
- ～ going from one farm to the next～
- ～ everybody had to work from sunrise to sunset.

(b) as～as の用法

- ～ there would sometimes be as many as thirty-five or forty people～
- ～ as fast as the berries could be gathered.

(c) if－clause

- If it had been a good season for the berries and if there were many berries to pick, ～

とif-clauseをたたみかけているのは、核となる語句の繰り返しによって問題の存在する個所を強調したいためであろう。

このように、引用文の中だけに限っても、繰り返しの用法が多いことがわかる。“The Strawberry Season”だけでなく、他の作品についてみても繰り返しの表現が多いのであるが、いくつかの作品をみていった中で、特によく使われているなと思う用法に、so～that 構文、as～as 構文が挙げられる。その一例を“Crown-Fire”の中から取り上げると次のようなも

のがある。

- ～ each time I had tried to walk home with her in the evening she had run so fast that I could not keep up with her[28].
- ～ she was so frightened (that) she did not know what to do[29].
- ～ and the reflection of the fires against the sky was so bright (that) I could even see the tears in Irene's eyes ～[30].
- Her heart beat so madly that I could feel with my hands its throb through her body, and her breath came so quickly that, even though I held her firmly, her breasts trembled as her lips were doing[31].
- Her heart was beating as madly as that of a captured rabbit[32].
- Then as suddenly as I had placed my hand over her breasts, ～[33].

また、"We Are Looking at You, Agnes"（「家出娘アグネス」）はかなり多くの繰り返しの表現が使ってある。looking at me という語が31回、say something は23回、否定形の say anything は10回使われている。この他にも、say a word や say it など、say がたくさんでてくる。以下は "We Are Looking at You, Agnes" の一部である。

There must be a way to get it over with. If somebody would only say something about it, instead of looking at me all the time as they do, when I am in the room, there wouldn't be any more days like this one. But no one ever says a word about it. They sit and look at me all the time-like that—but not even Papa says anything.

Why don't they go ahead and say it—why don't they do something—They know it; everyone knows it now. Everybody looks at me like that, but nobody ever says a word about it[34].

（それをもうおしまいにする方法があるはずだわ。家の中でいつもあんな風にわたしのことを見つめてばかりいないで、そのことについて誰かが何かを言ってくれれば、もうこんな思いをする日は一日もなくなるのに。誰もそのことについてひとことも言おうとしない。みんなあんな風にずっとわたしを見て座っているだけ——パパさえも何も言って下さらない。

なぜみんな思い切ってそのことを言おうとしないのかしら——みんなそのことを知っているのに、あんな風にわたしのことを見つめているだけで何も言おうとしない[35]。）

For God's sake, say something about it this time so I won't have to come back again next year at Christmas and sit here all day in the parlor while you look at me. Everybody looks at me like that, but nobody ever says it. Mamma makes Elsie stay out of my room while I'm dressing, and Papa sends Lewis downtown every hour or two. If they would only say something, it would be all over with. But they sit all day long in the parlor, and look at me without saying it[36].

（お願いだからそのことについて何か言って下さい。そうすればこんどは来年のクリスマスにも帰ってくることはないし、みんなに見られながら居間にずっと座っている必要もなくなるのだから。みんながあんな風にわたしのことを見ながら、誰もそのことを言わない。ママはわたしが着替えをしているとき、エルシーをわたしの部屋に入れないようになさっている。パパは

ルイスに下町にでも行っておいでとおっしゃる。もし、みんなが何か言ってくれさえすれば何もかもおしまいになるのだけど。でも、みんなずっと居間に座ったまま何も言わないでわたしのことを見ているだけ[37]。)

文体の構築上、これだけ同じ語句を繰り返し使っているというのは、コールドウェルが意識してこの作品を書いたといえるだろう。繰り返しの表現は、読者に強い印象を与えるための強調のためだろうし、また物語の中に、ある一定のリズム感を持たせているように感じる。私は散文詩を読んでいるような気分になった。

2．分詞構文・現在分詞・動名詞の頻度

生彩あるダイナミックな表現、ひきしまった迫力ある簡潔な文体の構築には、分詞構文や現在分詞・動名詞が重要な要素となってくると考えられる。分詞構文は、"The Strawberry Season" では合計10回、"Crown-Fire" では合計18回使われている。

"The Strawberry Season" 中の分詞構文

(a) Some men brought their families along, <u>going</u> from one farm to the next as fast as the berries could be gathered[38].

(b) One of us would slip up behind a girl while she was stooping over <u>filling</u> her baskets and drop a big juicy ripe strawberry down her dress[39].

(c) The same thing that made you think of it, I guess," she answered, blowing the sand off a handful of berries and <u>putting</u> them into her mouth[40].

(d) She used only the thumb and the next two fingers, <u>making</u> a kind of triangle that grasped the berry close to the stem and lifted it off[41].

(e) <u>Believing</u> that I was several rows away she thought it was a bug or insect of some kind that had fallen down the opening of her dress[42].

(f) She sat down quickly, <u>hugging</u> herself tightly[43].

(g) "I know you didn't mean to," she said, the tears <u>falling</u> on her lap, "but it did hurt. You mustn't hit me there[44]."

(h) "I'll never strawberry-slap you again as long as I live, Fanny," I pleaded, <u>hoping</u> she would forgive me[45].

(i) Hardly <u>knowing</u> what I was doing I hugged her tightly in my arms and kissed her lips for a long time[46].

(e)を除いて、すべて「付帯状況」を表す分詞構文である。まぎらわしい用法として、(g)を「同時進行」を表す独立分詞構文と考えたが、付帯状況を表すwithの省略されたもの、つまり～with the tears falling on her lap,...とみることも可能であろう。また冒頭に出てくる～everybody went from place to place <u>helping</u> the farmers gather them.のhelpingは現在分詞の補語的用法と考えた。

"Crown-Fire" 中の分詞構文

(a) Over her shoulders her long hair fell in waves, <u>ripping</u> like the mane of her father's sorrel mare pacing along the cowpath in the pasture[47].

(b) The moment I first saw her, I sat down quickly, <u>trying</u> to hide myself in the tall roadside grass[48].

(c) Irene was walking slowly, looking backward every few steps at the fires on the eastern ridge[49].

(d) Once she had said she did not hate me ; but no matter what I said to her, she continued to run away from me, leaving me alone in the road[50].

(e) "Please, Irene," I begged, catching her arm and holding it tightly in my hands, "please let me walk part of the way home with you. Will you? Please let me, Irene[51]."

(f) "Irene," I said, trembling until my voice sounded as though it were hundreds of miles away, "please let me, this one time. Will you ?[52]"

(g) "I've got to go with you, Irene," I said, clutching her arm tighter[53].

(h) Because I had been waiting all summer, ever since school was out in June, for the time to come when I might walk along the road with her in the evening … because I had lain awake night after night, staring at the blackness, thinking of her … because I could not keep myself from touching her … I released her arm and pressed my hand over her bosom[54].

(i) Her head was turned towards the fires on the ridge when I clutched her, and she closed her eyes tightly, and, her lips parting, her breath again came quick[55].

(j) "Please, Irene," I begged, running after her ; "please come back. I didn't mean to make you run away. Let me go with you[56]."

(k) At any other time I would have put my hand over her mouth ; this time I clutched her in my arms, holding her more desperately than I had the first time[57].

(l) She stood still, looking backward at the fires on the ridge[58].

(m) We stood in the churchyard path, waiting[59].

(n) We were standing close to each other, holding each other[60].

(o) I waited, shaking all over, to hear her reply[61].

(p) While I waited, clutching at tree beside me, she looked off into the distance towards the ridge where the fire had been[62].

(q) I went a step nearer, gripping the rough bark of the pine tree between my fingers[63].

(a)～(q)に下線をひいた語はすべて「付帯状況」を表す分詞構文である。"The Strawberry Season" の中には、the *opening* of her dress や *good-looking* のように、辞書の見出し語として採録されている単語を除いて、～ing形の単語が41回（現在分詞＝17回、動名詞＝14回、分詞構文＝10回）、"Crown-Fire" の中には、64回（現在分詞＝29回、動名詞＝16回、分詞構文＝19回）ほど出てくる。*THE STORY OF ERSKINE CALDWELL* では、"The Strawberry Season" はわずか3頁と6行、"Crown-Fire" は4頁と24行に収められているから、平均して1頁に13～15回もの～ing形の単語が用いられていることになる。フォークナー、ヘミングウェイやスタインベックといった同時代のアメリカ作家と比べて、コールドウェルは～ing形の単語の使用頻度が最も高い作家といわれるのも納得できる。作家が文詞構文を多用す

るのは、時として文意は曖昧になることはあるが、簡潔でひきしまった、ダイナミックな文章になるからである。

3．総語数と単音綴語の割合

コールドウェルは自伝 *Call It Experience* の中で、「あなたが、自分の作品のいちばん重要な要素と考えているものはなんですか」という問いに答えて、「できるだけ短い単語を使うこと。辞書をみなければわからないような単語は使わないこと。いつか私は、四音綴以上の単語は全部消して、自分専用の辞書をつくったことがあります[64]」と述べている。

そこで、コールドウェルがいかに単純明快な語句を駆使して物語を創っているかを示すために、すべての単語をその音綴によって分類してみた。

	"The Strawberry Season"	"Crown-Fire"
単語総数	1,294	1,971
1音綴語	1,020	1,623
2音綴語	217	319
3音綴語	40	20
4音綴語	9	1
複合語	8	8

1音綴語が "The Strawberry Season" では、約78％、"Crown-Fire" では、約82％を占めている。このことはコールドウェルが簡明直截な口語体の表現を用いるために、かなり意識的に、表現上の技巧を心に砕いているかを理解できるのである。"The Strawberry Season" は、コールドウェルの第一短篇小説集である「アメリカの大地」(*American Earth,* 1930) に収められている作品で、"Crown-Fire" は第二短篇小説集「われら生けるもの」(*We are the Living,* 1933) に収められている。1音綴語の割合が "Crown-Fire" のほうが高いという事実は、コールドウェルが年を追うごとに日々単音綴語の語数を増やして単純明快な文体を構築しようと努力しているということがわかる。

おわりに

"Crown-Fire" と "The Strawberry Season" の2つの作品を見てきた。どちらも青年男女の恋愛模様や、思春期の性への目覚めを、官能的な描写を交えながら表現している。官能的描写といっても、少年の純粋無垢な感情を素直に表現しており、のびやかに健康的で、ほのぼのとした印象を受ける。

"Crown-Fire" では、少年少女の心理的変化を山火事を背景にして、実に見事に描いている。"The Strawberry Season" の3人称から始まり、1人称複数、そして1人称単数と徐々に焦点をしぼっていくという物語の展開も、コールドウェルの文才を表しているといえよう。この2つの作品の共通点ともいえる点に、物語の結末についてがある。"Crown-Fire" では、少年少女の一途なそして時に激しく燃え上がる恋を描いており、樹冠火がもっとも燃え上がったと

ころで2人はキスをする。しかし、その後の“Will you let me walk home with you tomorrow evening, Irene, and every evening？”というシドニーの問いに、一言も答えずにアイリーンは去って行ってしまうのである。一度結ばれたように感じた2人であるが、このアイリーンの行動により、2人の行く末はわからなくなった。というより、次に山火事が起こるまではアイリーンをつかまえることができないだろうと、2人の別れを表している。また“The Strawberry Season”のほうも、お互い別々の道を歩いていき、苺の季節も終わりかけていたというように、別れの痛みを残して物語は終わる。「彼女に会いたいと思うなら、毎日道ばたの草むらにかくれて、彼女が通りかかるのを見張っていなければならない」「いつの日かまた彼女をつかまえて、この日の夕方のように両腕に抱きしめてやろうと心に決めていた」とこれからのことを決心し、いつの日か、恐らく来年の夏に望みをかけるシドニー。これに対して、“The Strawberry Season”では、明日はどこへ？とファニーの行方が気になる「ぼく」自身がどこへ行くのかわからない状態であるだろう。季節労働者であるため、家族ぐるみで農場を渡り歩く。しかも苺の季節は終わってしまう。もう二度とファニーには会えないかもしれないという別れが、一層切なさをかき立てる。登場人物の今後の行方をはっきりと表してはいないものの、さりげなく暗示させる表現をすることにより、読者の想像をふくらませている。コールドウェルの作品は、アメリカ南部の貧困、迫害や虐待に対する社会抗議の物語が多いのであるが、その中でこの2つは、甘く切ない恋を主題とした作品であった。コールドウェルはただ作品を描く目的のために描いていたわけでわなく、作品を通して伝えたいことや問題意識、感動を見出し、たくさんの人々に知ってもらいたいという思いがあったのだ。そのため、コールドウェルの作品は、単におもしろいだけでなく、心に訴えかけられるようなものがあると思う。1930年代の作品が、今なお読み続けられているのも納得できる。私自身も、もっとたくさんのコールドウェルの作品を読んでいきたいと思う。

註

(1) *THE POCKET BOOK OF ERSKINE CALDWELL*, ed. HENRY SEIDEL CANBY. NEW YOEK : POCKET BOOKS, INC., 1957 p.ix, ll.2 − 10

(2) 亀井俊介『アメリカ文学史講義〈3〉』(南雲堂, 2000) p.42, ll.6 − 9.

(3) The Erskine Caldwell Website (http://id/mind.net./~flatch/index.html)

(4) Erskine Caldwell, *THE STORY OF ERSKINE CALDWELL* (The University of Georgia Press, 1996), p.464, ll.17 − 23.

(5) 加藤修訳『生きとし生けるものの物語』(新樹社, 2001) pp.14 − 15, ll.13 − 6.

(6) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.465, ll.23 − 27.

(7) 加藤修訳, 前掲書, p.17, ll.1 − 4.

(8) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.466, ll.6 − 9.

(9) 加藤修訳, 前掲書, p.17, ll.16 − 18.

(10) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.466, ll.19 − 22.

(11) 加藤修訳, 前掲書, p.18, ll.10 − 12.

(12) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.466, ll.6 − 9.

(13) 加藤修訳, 前掲書, p.17, ll.16 − 18.

(14) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.465, ll.8 − 15.

(15) 加藤修訳, 前掲書, p.16, ll.4 − 9.

(16) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.34, ll.9 − 17.

(17) 加藤修訳, 前掲書, p.8, ll.6 − 13.

(18) Erskine Caldwell, *op. cit*, pp.34 − 35, ll.20 − 2.

(19) 加藤修訳, 前掲書, p.9, ll.3 − 10.

(20) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.36, ll.15 − 20.

(21) 加藤修訳, 前掲書, p.12, ll.4 − 8.

(22) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.36, ll.23 − 33.

(23) 加藤修訳, 前掲書, pp.12 − 13, ll.11 − 1.

(24) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.37, ll.5 − 6.

(25) 加藤修訳, 前掲書, p.13, ll.8 − 9.

(26) Erskine Caldwell, *JACKPOT* (THE FALCON PRESS, 1950), p.141.

(27) Erskine Caldwell, *THE STORY OF ERSKINE CALDWELL*, p.34, ll.1 − 8.

(28) *Ibid*, p.464, ll.18 − 20.

(29) *Ibid*, p.464, ll.26.

(30) *Ibid*, p.466, ll.14 − 16.

(31) *Ibid*, p.467, ll.13 − 15.

(32) *Ibid*, p.465, ll.1 − 2.

(33) *Ibid*, p.465, ll.31 − 32.

(34) *Ibid*, p.596, ll.1 − 8.

(35) 加藤修訳, 前掲書, p.112, ll.1 − 6.

(36) Erskine Caldwell, *op. cit*, pp.600 − 601, ll.34 − 4.

(37) 加藤修訳, 前掲書, p.120, ll.12 − 18.

(38) Erskine Caldwell, *op. cit*, p.34, ll.5 − 6.
(39) *Ibid*, p.34, ll.21 − 23.
(40) *Ibid*, p.35, ll.15 − 16.
(41) *Ibid*, p.35. ll.22 − 24.
(42) *Ibid*, pp.35 − 36, ll.36 − 1.
(43) *Ibid*, p.36, l.7.
(44) *Ibid*, p.36, ll.12 − 13.
(45) *Ibid*, p.36, ll.21 − 22.
(46) *Ibid*, p.36, ll.30 − 31.
(47) *Ibid*, p.464, ll.3 − 5.
(48) *Ibid*, p.464, ll.6 − 7.
(49) *Ibid*, p.464, ll.10 − 11.
(50) *Ibid*, p.464, ll.22 − 23.
(51) *Ibid*, p.464, ll.27 − 29.
(52) *Ibid*, p,465, ll.3 − 4.
(53) *Ibid*, p.465, l.16.
(54) *Ibid*, p.465, ll.23 − 27.
(55) *Ibid*, p.465, ll.29 − 31.
(56) *Ibid*, p.465, ll.34 − 35.
(57) *Ibid*, p.466, ll.29 − 31.
(58) *Ibid*, p.466, ll.31 − 32.
(59) *Ibid*, p.466, l.34.
(60) *Ibid*, p.467, ll.5 − 6.
(61) *Ibid*, p.467, ll.27 − 28.
(62) *Ibid*, p.467, ll.30 − 31.
(63) *Ibid*, p.467, ll.32 − 33.
(64) Erskine Caldwell, *CALL IT EXPERIENCE* (A SIGNET KEY BOOK, 1956), p.188.

参考文献

THE POCKRT BOOK OF ERSKINE CALDWELL, ed. HENRY SEIDEL CANBY. NEW YOEK : POCKET BOOKS, INC. , 1957.

亀井俊介『アメリカ文学史講義〈3〉』(南雲堂, 2000)。

Erskine Caldwell, *THE STORY OF ERSKINE CALDWELL* (The University of Georgia Press, 1996).

加藤修訳『生きとし生けるものの物語』(新樹社, 2001)。

Erskine Caldwell, *JACKPOT* (THE FALCON PRESS,1950).

Erskine Caldwell, *CALL IT EXPERIENCE* (A SIGNET KEY BOOK, 1956).

(卒業論指導教員　北嶋藤郷)